



祝辭

浜田 博

に新築移転してより満十年を経過し今般新築移転十周年の記念式典が開催せられるにあたり衷心よりお祝いを申しあげます。

頤りみますると昭和三十三年七月ごろより当時の幼稚園舎に近接して旅館が建設されこれが教育環境上放置できないので学校、父兄一丸となつて環境改善に努力することとなつたのであります、旅館建設地が大津駅前という特殊

の必要性も充分考えられ、遂に東浦の校地自体が現在の状況では教育に適さぬのではないかとの問題となつたのであります。幸い、県当局もこの事情を御賢察下され、昭和十三年六月定例本会議において県議会は附属学園は昭和町の元滋賀大学教育学部跡地に新築移転すべきが適當であり、その財源の一部は助成する旨の意見書を議決され内閣總理大臣、関係各省大臣、衆、參

年半位は進展をみなかつたのであります。が、遂に昭和三十一年度予算に中学校の新築経費が計上され順次小学校、幼稚園の新築、体育館、プールの建設、校庭の整備、特殊学級用の校舎、暖房施設ができる。今日みると如き立派な学園となつたのであります。

属の子どもの名前を挽回し体育の向上は著しいものがあると聞いております。このような風評を聞くたびに苦しかった過去の運動を思い出しながら嬉しい感じがします。拙ないことを書き恐縮ですが、附属学園の今後の御発展を祈念し祝辞に代えさせていただきま

和三十九年四月に竣工し、翌四十年四月に附属小学校及び幼稚園の本館が、そして四十年には体育館とプールが完成し運動場の整備が終わりました。こうして完全に大津駅前の旧女子師範学校校舎から現在の校舎へ移転が完了して以来、はや十年の歳月を経ました。その間には更に全館の集中暖房設備の完成、特殊学級の新設と新館の建立、校内の緑化の促進、給食設備等が年を追つて整備され、私達は今日すばらしい設備と勉

快適な学校生活をたのしむことができます。これらすべてが校舎移転の運動から始まって完成までの大事業に取り組んで最後まで努力していただいた

大学当局、附属学校の各位並びに後援会・PTAの皆様の御援助のお陰であり、またより良い附属学校へと毎年設備充実に努力を続けてくださった歴代

年へ

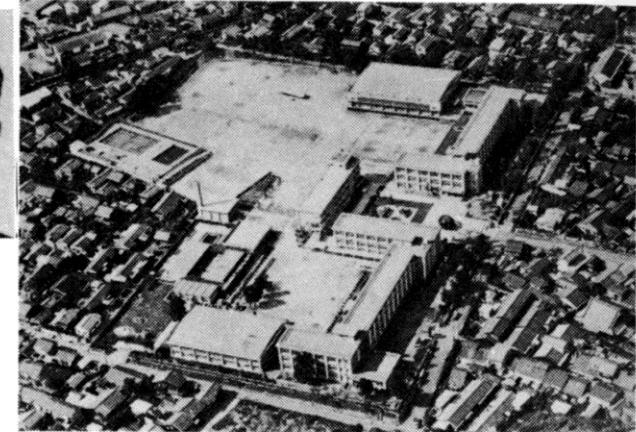
はないことで、すべて人の心  
内面的問題であります。よい  
環境、よい設備もその達成の  
ための一条件であつて、これ  
を使う人の心  
によつてすぐ  
れた効果もあ  
げることがで  
きるし、近代  
設備を一時誇  
るだけの設備展示校に終るこ  
ともなるでしょう。かつての  
松下村塾は僅か二年にも満た  
ない間の教室でしかなかつた  
けれども、その門下からは近

今の世相、福祉優先、個人の幸福の追求に急なあまりに極端な利己主義が道徳の根元であるかのように歪んでいる中に、わたくしたちの附属学校こそ父兄も先生も生徒も能 力に応じて個性を生かし、しかも全体と協調して伸びる暖かい仲間であってほしい。そして、次の創立二百周年記念式が喜びに満ち溢れて迎えられるよう心から祈るものであります。



挨拶

附属中学校長  
松本政彦



## 移転新築10周年記念誌

発行所

滋賀大学教育学部附属学校園  
大津市昭和町 10-3 TEL (代表) 22-6569

代日本の基礎を確立した多くの人材が輩出しました。この松下村塾には教育機器と呼ばれるものは何一つなかつたし、また先生の吉田松陰が指導法に特別すぐれた技術をもつ人であつたとも聞きません。あつたものは一人一人の塾生のすぐれた所を認める師の愛情熱・国を愛する烈しい情熱、学ぶものの感動だけではなかつたのか。それについても今日指導法の研究はいちじるしく教育機器の進歩は昔の授業の面影もないほどに精巧を極めているけれども、山に入つて山を見ずの怖れを多分に感じます。

A black and white decorative illustration featuring a cluster of stylized flowers, possibly sunflowers, with large, prominent centers. A bee is depicted flying over the flowers, its wings and body detailed with fine lines.





前文部省教育施設部長

菅野誠

移転新築十周年を祝して

私は省内の了解をとりつけ、大蔵省に對しては予算額のわくの拡大に全力を傾けた。わくがきゅうくつではとうてい附属学校の施設整備にまで予算がまわらないからである。

なお、新校舎竣工時の記録に若干の誤りがあるので訂正させていただきたい。それは附属学校の移転順序を文部省は中・小・幼の順と考えたことであるが、これは間違いである。事実は、予算が苦しいので中・幼・小の順としての年次計画をご相談申し上げ

え、心からお慶び申し上げます。昭和三十四年に附属学校の新築問題がおこり、四十年にいたつてついに中小幼全校全の完成を見ました。当時この運動のために賜った各方面の方々のご尽力特に学内諸先生の夜を日についでのご苦労や浜田博後援会長を中心とするPTAの方々の献身的なご援助が、いまあらためて感謝の念をもつて思い出されます。

頬が、いまも眼に浮かびます。東浦の旧校舎跡は、十年の間に、昔の面影を全く残さぬまでに変わってしまいました。ここに学んだ多くの同窓の方々は、いまこの地に立って、それぞれの回想にふけり、感概無量であろうと思ひます。先日、久しぶりに附属学校を訪ねました。あわただしかった移転のころにくらべて、学校庭の樹々、校舎など、学校全体の雰囲気に一段の落ちつきが感ぜられます。こどもたちは自由に広い校庭をかけま



元附属小学校長

牧倫

旧校舎の思い出

思い起こせば昭和三七年の夏のことであつた。私は文部省教育施設部の計画課長の職についてばかり、事務引継ぎの後、直ちに昭和三八年度の国立学校施設整備予算の要求編成にとりかかつた。それまで、もっぱら公立文教施設関係を手がけていたので、正直のところ国立学校のようすは皆目見当がつかなかつた。特に滋賀大学附属学校の移転問題は、数年来国と県と市との間で、土地の話がこじれて、手がつけられないとの話を聞いていた。予算総額も少ない當時のことである。そんなものは後年まわし、アウト、といふのが常識であった。その時、とび込んで来られたのが浜田博先生である。お話を承った。国と県と市とのどうどうめぐりの話に決着をつけるには、何かきつかけがいる。県と市のほうは私が話をつける。君は何としても新築移転の予算を貰ってくれ。そんな話であった。先生の涙を浮かべての熱弁についてほりとさせられた。これが滋賀大学附属諸学校とのおつきあいをはじめた最初の出会い、であつた。浜田先生は県と市との間の話をつけるのに奔走された

**女附中創立** 女子部附中の最初の校舎は、附小の特別教室の棟の二階であった。一年生と二年生の二学級で教官室は真中の小部屋であった。一階運動場側が用務員室だった。**宿直室** 宿直室は玄関のそばにあって月に一度ぐらいまわって来た。大晦日や元日に当たった年もあるが、創立新任の年の八月十五日当直中に、妻の安産の電話があり、女兒誕生とのことだつた。旧校舎が無くなる数年前にこの子も亡くなつてしまつた。

教室移転 創立の翌年度二年生が入学してくると教室が不足するので、春休みに本校の二階東端の四室に移転し、専任教官も五名となつた。教官室の窓からは、すぐ前に裁判所と教会が見え、遠く比叡山と比良の山々も眺められた。

昭和二十四年度には男子部と女子部が合併し、本校は膳所校舎へ、附属は東浦校舎へと大移転し、附属中学も名実とともに、本館で単独統合中学校となつた。ただ運動場がきわめて狭く、しかも小・中共

卒業生この想い出多い旧校前附属小学校  
上 杉

童通用門から出入りしていた  
本校の玄関（附属に対し）て学  
部を本校と呼んでいた）は子  
どもの寄りつけないほどの威  
厳があった。  
運動場は狭小であった。直  
線距離五〇米が斜めにしてよ  
うやくというところだが、遊  
具はそろっていたし、きれい  
な藤棚があった。表慶館の庭

残念なのは、今日の十周年記念の盛儀に、新築問題に心魂をかたむけられた、当時の片淵勝二附属中学校長のお姿の見られないことです。いまは亡き先生のお人柄とご功績をしのび、追慕の念を禁ずることができません。

四十年三月末日に、小学校と幼稚園が、東浦の古びた校舎、狭い運動場に別れをつげて、近代的に設備された現在の新校舎に移りました。待望の日を迎えた子どもたちの喜びにあふれ、期待してみちた顔

今年は附属学校創立百年に  
あたるとのこと。明治初年、  
わが国教育の草創期から今日  
にいたるまで実に一世紀の長  
きにわたり、その時代時代の  
社会の要望にこたえて、数多  
くの有為な人材を育て上げた  
附属学校の功績は、燦然と輝  
いています。まことにご同慶  
の至りに存じます。

終りに、この光輝ある歴史  
と伝統をつけつき、附属学校  
が今後ますます躍進されるこ  
とを衷心お祈りいたします。

附属幼稚園と目と鼻の先に旅館が建つということが口火となつて、移転新築の胎動が始まつた。昭和三十四年から二か年は苦惱にみちた二年間で、時のPTA会長の浜田先生、中学校長の片淵先生の御苦勞は実に痛々しいものでした。昭和三十七年八月のはじめ、比叡山観光ホテルに内藤文部次官を追い、附属の校舎の視察が実現したことが、校舎新築に明るい希望を与えた。同じ月の二十日附属中学校新築予算が文部省から大蔵省に要求されたとの連絡が直接附属に入つた時、確実に新築の陣痛がはじまつた。

して下さった。結局浜田会長の熱意が通じたのではないで、『どうか』と述べておられますが、今は先生の苦労話の聞けないのを残念に思います。

新築苦労話あれこれ



てだ。」一まるでお伽きの国へきたような、夢のある設計ですね。」「保育室からテラス、中庭へのひろがりは、遊びを自由にひろげることができて楽しいでしよう。」など、幼稚教育の環境としてこうあればといふ願いが、設計の中にいろいろ具体化していることで、強い注目と期待がよせられていました。

課長の胸にカチンと響いたようでした。また、位置についても、いろいろの案があった末、現在の場所に落ちついたのです。今日、附幼は三年保育課程を新設され、五学年級の大きな幼稚園になり、あの頃の園児たちはもう中学生、高校生になっています。健やかなご発展を心からうれしく思います。

との注文でしたが、苦労は浜田PTA会長、片淵中学校長、牧小学校長など矢面に立って下さいました方々にあつたので、裏方はただウロウロと事態の推移を見守っていたのです。いまは故人となられた片淵勝二先生は四十一年の完工記念号に

なつかしの  
学舎



なつかしの  
学舎

元附属中学校教頭

前附属幼稚園教頭

卷頭 沢芳子

朽だけれども、落ち着いた、表  
隣り、隣りの力で間は  
暖かさを感じる木造校舎で、  
楽しく過ごすことができた。  
校舎の正面玄関の大きな階  
段と時計がまず目を引き、そ  
の長くて黒光りする手すりは  
しばしば私のスベリ台に変わ  
ってくれた。当時、朝日ヶ丘  
町からかよっていた私は、運  
動場と裁判所の間の狭い道を  
毎日往復したのだが、遅れそ  
うになるたびに、溝を飛び越  
は、教室以外のいろいろな建  
物があつて、後に、それが寄  
宿舎であることがわかつたの  
だが、当時は、何が出るかわ  
からぬ恐しい建物のように思  
い、好奇心と探險気分で、遊  
びまわつたことも何度かあつ  
た。その他、パンとミルクの  
匂いのする給食室、転ぶと痛  
いコンクリート床の体育館、  
珍らしいので楽しみだつた理

昭和三十八年度附属中学校卒業生

卷之三

も美しい日本庭園式のもので、附屬統合の校舎になつてからは、附屬中学校・附屬小学 校・附屬幼稚園の一、二〇〇名ほどがはいつた。運動場がせまいので、体育の時間も調整をして使用しな

ければならなかつたし、むろんプールも無かつたので、夏になれば水泳船で真野浜まで水泳に往復するというようでした。

昭和三十八年度附属中学校卒業生

三

博

愛光幼稚園の角を曲がると  
市営駐車場の車が目に入る。  
その前を細い道が横切り、左  
は裁判所へ通じ、右へとれば  
駅通りへとぬけられる。錆  
びて動きにくくなつた鉄の門  
を入り、振子時計のある階段  
を二階へ上ると、廊下の壁  
板はあちこち破れ、割れた窓  
ガラスの教室ではストーブが  
たかれている。そこでは子ども  
もが二人黒板の前に立ち、同  
じ数学の問題を解こうとして  
いる。彼達は来る時も帰る時  
も、休み時間さえいっしょの  
噂の二人であるらしい。平和  
堂へ行こうと車を駐車場へ入  
れる時いつも幼稚園の横の正  
門のあつたあたりでこんな事  
を思い出す。

昭和三十年から三十九年ま  
でを小中を通じて親しんだ旧  
校舎であるが、我々は新築直  
前まで旧校舎でがんばつてい  
たことになる。当時は特にい  
たみも激しく、確かに冬になる  
とストーブの石炭が一クラス  
一日二回の配給制となつてい  
た。どういうわけか近くの生  
徒がのぼせる程たぐいで石炭  
はすぐ底をつき、あげくは廊  
下の壁板や教卓の板を燃料代  
りにしてはストーブをつまら  
せたものである。新校舎の今  
の子ども達を見ていると私達  
の後輩というより、違う学校  
の生徒のように思えるのは何  
となく淋しく時間の経過を考  
えさせられる昨今である。

科の階段教室、動物の標本が とはいえ今はあとかたもない  
たくさん並ぶ、氣味の悪い理 旧校舎が、無性になつかしく  
科室の薄暗い廊下等……。 また、たまらなく淋しく感じ  
思い出はつきない。時の流れ るのである。

移植の思い出

元附属中学校教頭

七  
木

米藏

昭和三十九年三月三十一日  
午前十時二十分、附屬中学校  
職員生徒一同は堂々の隊伍を  
組んで住み馴れた東浦校舎を  
出発し、十一時十分膳所の新  
校舎屋上で感激の国旗、校旗  
の掲揚を行つた。東浦出発に  
当たり、今は亡き片淵校長先生  
は「今日は魂の移転する日で  
ある。先輩が築いてきた附属  
の立派な伝統を膳所の地へ今  
日は移すのだ。」と訓示され  
たことを昨日のことのように  
思い出されます。

君も知っているだけに、旧校舎への未練も断ちがたく喜びと悲しみの交錯した複雑な気持ちであったことは否定できないことだつたと思います。しかし、昭和三十四年以來の長年月、浜田先生を先頭に多くの方々の御尽力によつて完成された新しい校舎は何といつても希望の光であります。寝食を忘れて、校舎、教室の設計に努力し合つたこと備品の移転や整備に汗を流したこと、芝生植えにコート整備にはげんだことなど今はただなつかしい思い出に変わつたようです。

希望に満ちた  
あるいは丁から  
重みを支えているような、逞  
しく力強く明るい数本の「手  
一」をデザインした級友の作品  
が選ばれました。それは、当  
時の私達の気持ちにまさにぴ  
ったりのデザインでした。

木造の、歴史を含みこんで  
重々しく、様々の「謎」や探  
険の喜びを提供してくれた旧  
校舎から、突然眩いばかりに  
明るい近代建築に移つて、ち  
ょつととまどい気味の毎日で  
した。とにかく、陰の部分、  
隠れる所がなくて悪戯の仕方

私は移転した時は、広い運動場と中学の校舎のみで、隠れんばをする余地もありませんでしたが（そのかわり鬼ごっこは爽快でした）、その後どんどん設備も整い、多くの生徒がそこに学んで、今では生徒達の悪戯の犠牲になってしまった箇所もあるでしょう。次々と新しい創意で学園を楽しい所にしてほしいと望んでいます。

人移り始めたのが冒頭の日で

新しい伝統を作っていくと  
いう気概がありまして、希

昭和四十年度附属中学卒業生



元附属小学校教頭

巧

わたしのが十七年ぶり再び附属に入つたのが昭和三十八年、中建設開始の年である。幼稚園設立問題から校園移転新築に係る迂余曲折はどなたか

取りである。小・幼稚舎の同時施行ということで、敷地・建築基準・予算の基本的な条件の絡みあいの中で、半永久的な附属教育施設の構想

(片淵中学校長を先頭に  
新校舎に入る)

わたしは十七年ぶり再び附属に入つたのが昭和三十八年附中建設開始の年である。幼稚園設立問題から校園移転新案に係る迂余曲折はどなたかが記されようが、県教委に在職していた関係でおよその経緯大綱は承知していた。いわば進行しはじめた列車に乗りこんだ形で、後三か年、同一のキャンパスに附属校園施設充備の大事業が実現したわけである。あまり類例のない企画・進捗ぶりであつたが、そのエネルギーの根源は、起工以前数か年の浜田後援会長を中心とする執念ともいふべき熱意、計画性、牽引力にあつたといえよう。

取りである。小・幼稚舎の同時施行ということで、敷地・建築基準・予算の基本的な条件の絡みあいの中で、半永久的な附属教育営為の場を構想するわけであるから責任はまさに重大。在職職員の衆知を結集すべく、調査・研究・構想の吐き出しと調節・基本的な条件の制約にぶつかり、その好転に伴う変更ぞの度毎にスタートからの練直し、といった日々が続き、ミニモデルが積み上げられては、こわされた。幸いに多才の士の集まり、完工後の備品の全面的な新調とともに、当時としては可能な限りの細かな配慮が校舎の隅々に具現した。

(片淵中学校長を先頭に  
新校舎に入る) →

仕事ではなかつた。しかし、私達は一つ一つの仕事が私達の後に続いている後輩達のより良い学校生活のために役立つ大事な仕事なんだ、そんな気持ちで作業をしていたと思つう。

昭和三十九年度附属中学校卒業生

山元明子

元附属中学校教頭

新校舎移転を記念して、手拭がつくられることになり、生徒達が、案を持ち寄りまし

## この10年（東浦校舎の今昔）



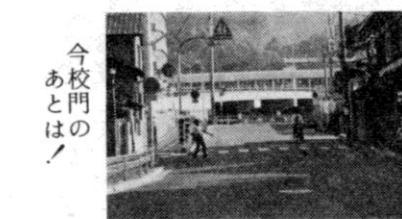
思い出の小道も今は…



この大きな木の下にどんな思い出がある：



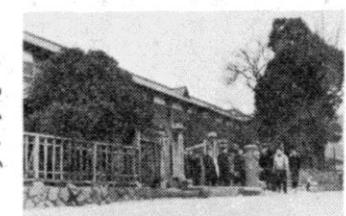
この道路の半分までぐらい  
は、もと我が校地



今  
校門  
あとは  
ノ



今  
見  
よ  
う  
と  
思  
え  
ば



なつ  
校門



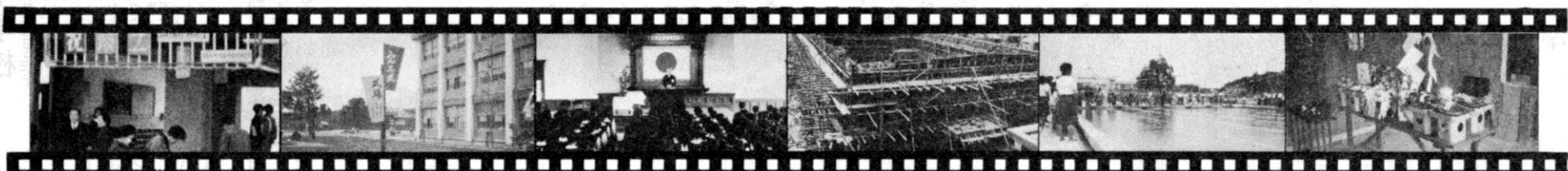
表半所の見えた運動場



校門前  
教会の



今、  
教会は  
ビルに囲まれて



略年表

幼稚園

◎ものごとに「もと」に迫る  
は右のようくに設定した。  
原点、あるいは基底や基本がある。現象そのものは見えやすく、はなやかであるが、原型とか基本にあたるものは、見えにくく、忘れ去られやすい。「もと」にたちかえって見つめることは、実践的な人間を育成する上できわめて重要であると考える。  
◎現代は数多くのものに接するあまり、ややもするとそのものの原型を無視したり、本当に忠実になることが少なくなる。それは、ものごとの本來性に欠けていくことになるその意味からも「もと」を正すことは大切なことであると考える。

◎具体的には、よく見、よく聞き、よく話す一年生。友だちのよさをみつける二年生。協力してやる上げる三年生。みんなでねうちは志向する四年生。広い視野から自分たちを律する五六、に育つてもらいたい。

◎あたかも本年は附属小学校創立百年の年。この意味からも、本年はものごとの「もと」にたちかえって考え方話し合い、行動する子どもをめざしていきたいと考えている。

○具体的には、とくめ合うことは、互いを正すことにもなるし、ものに正対していくことにもなる。

どうぞ、この会議で、この言葉ではないだろうか。「もと」とをみつめ合い、み

(2) 主体的な学習態度の育成をはかり、教育機器の活用に努める。

(3) 施設、環境の整備をはかり、情操性の涵養に努める。

(4) 生徒理解を深め、ひとりひとりの能力と適性を伸ばす。

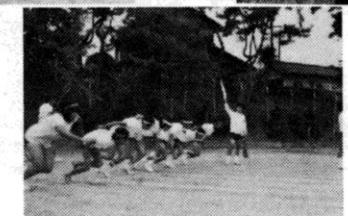
右にあげましたのは現在の附属中学校の教育方針、そして本年度の努力点です。

十年前、二十年前の中学校生活をみたとき、表面的にみられる姿はちがっているかも知れません。社会情勢が変わればひとりひとりの当面する問題も変わってくるでしょう。

周年記念誌を発行するに際し  
関係各位より、多数のお祝い  
のことば、思い出等の原稿  
資料をお寄せ頂き、紙面を充  
実することができた。

十年を振り返り、むかしの  
面影も無くなつた東浦の旧校  
舎跡に立ちまた。古い歴史と  
伝統を受け継ぎますます活気  
に満ちあふれた附属学校をな  
がめる。十年という年月が、  
ただいたずらに過ぎたのでは  
なく、そこには、多くの方々  
のご苦労、ご努力があつた。  
今我々は、もう一度、現在の  
附属を見つめ温故知新の精神  
を生かしながら力強い前進を  
願うものである。

## 現在の附属学園の教育



附属学校園の移転新築土

澄んだ目をくりくりさせながら「先生おはよう」と象さんの門でペコンと頭をさげて登園してくる元気な子どもたち。本園は現在三年保育年少(すみれ組)年中(さくら組)。二年保育年少(もも組)年長(きく組)。一年保育(ゆり組)の五クラスによつて構成され、一七七名の園児が在園している。

緑の芝生の上に白いロープをひき、「ぼく王」「ぼく田淵」「一ルイへ走るのやで」「セーフ、セーフ」「アウトやんか」あるだけの声をはりあげている五歳児。

サルビアの花びらをおさらばに、朝顔のむらさきのジユースをカッズに入れて「はい、どうぞ」「ありがとう」「ごちそうさま」とくすのきの大木のかげにござをしき、おまごとに熱中している四歳児虫かごを園庭におき、「出

根のすみっこへかくれていろいろ三歳児。

毎日生き生きと活動し、自ら遊びを見つけて熱中する子ども、中には家庭でおもちゃに恵まれているためか、工夫創造する意欲に欠ける子ども、何をするにも「先生どうするの」「先生して」と依頼心の強い子どもなどの姿が目される。

こうした子どもの姿から

- 友だちと仲よく遊べる
- 子どもに
- 仕事や遊びを最後まで
- やりぬく子どもに
- すなおで思いやりのある子どもに

この三つに重点をおき、情操豊かな子どもたち、すばらしい可能性をひめた子どもたちが、集団の中ですくすくとびてくれるようつとめている。

## (1) 本年度の努力点

(4) 間間にひるまず、自らを切り開いていく力を志としましていきます。

(1) 自他の人柄を尊重し  
心から愛し合える人間に  
(2) 知的な人間に  
美しいものにあこがれ

教育方針

中学校

けれどもひとりひとりの子供にも「こういう人に育つてほしい」と願う気持ちをつきつめていったとき、それは変わらないのではないかでしょうか。

本校では生徒の教育について、まず生徒を信頼し、生徒を理解することこそが最も肝要なことと考えています。許容的な自由な雰囲気、共感的な受容的な人間関係の中で生徒自らの行動を通してのみ目的的な生徒に成長するものと信じ、それを願って、生徒指導部、施設環境部、図書部などの各部の活動のなかで本年度の努力点の達成に努めています。また附属学校の使命の一つである教育研究の場ではひとりひとりが生きる学習を求めて、生き生きと、しかも友だちとともに協力して学習を進め、目標へ到達する授業のあり方を実践・研究しています。

生徒ひとりひとりの理解を基盤にして、規律ある学校生活の中で、それぞれの生徒が主体的に問題にとり組み、能力を伸ばし本校の教育方針を具現していくことに精進しているのが現在の附属中学の姿です。